

# 博士論文の要約

氏名 陳藝婕 (CHEN, Yijie)

論文題目 日本で見た西洋：傅抱石が受けた西洋影響に関する研究

本研究では、中国人画家の傅抱石（1904年—1965年）を対象とし、1940年代以降の新画風と日本留学の関係性を解明することを目的とする。これまで取り上げられてこなかった新たな文献と図像の資料を併せて、綿密な分析を行い、先行研究では等閑視されてきた西洋的な要素に注目する。そして、日本留学中に習得した西洋に関する情報をきっかけとし、彼の画風が革新された実態について明らかにする。

このような視座から傅抱石を対象とすることで、通説となった見解を一変させるような、新規性のある仮説を打ち出した。特に、中国で論じられてきた傅抱石に対する認識を刷新し、傅における西洋的要素の重要性を改めて提示することで、その領野を新たに開拓した。また、傅抱石は日本と縁のある人物であるが、日本の研究では使用される資料に限られているため、本論文では中国語の文献等を使用することで、日本における傅抱石像を更新することも目的とした。

そして、傅抱石が日本から受けた影響を検討するなかで、中国画壇との関係では見落とされてきた日本画家たちに注目した。例えば高島北海（1850年—1931年、元・フランスの林学・地質学留学生）、中川紀元（1892年—1972年、元・フランスの美術留学生）、清水多嘉示（1897年—1981年、元・フランスの彫刻留学生）などを取り上げ、日中美術史の展開に対して傅抱石がいかなる貢献をなしたのか、その価値について再考した。

まず、本論文は、およそ時代順に分け、傅抱石の渡日前（1934年まで）、在日中（1932年—1935年）、帰国後（1936年—1965年）といった三部から構成される。

第一部では、傅抱石が渡日する前に行った活動を分析し、彼が留学した動機を明らかにした。主に、「全盤西化」の社会背景、留学の契機、援助者の身分や意図、傅抱石の「民族主義」的な言説といった四つの論点に注目した。先行研究では、日本画や日本所蔵の中国古画が彼に与えた影響、というテーマが集中していた。しかし文献記録によると、彼の主たる動機は、日本を経て西洋由来の新たな知識を学ぶことにある。西洋美術理論、日本の洋画、日本に所蔵された西洋美術品、西洋風の要素を持つ日本画は、彼の留学経験の中で、重要な役割を果たしたと考えられる。このような見地から新資料を検討することで、留学期の経歴について、新たな見解を提示することが可能となった。

第二部では、彼が在日中に行った美術研究の方向性について分析した。1930年代の日本画壇の状況や東京で開催された展覧会の内容、また傅抱石が在学した帝国美術学校にまつわる情報などのコンテクストに基づいて、彼の思想的な変遷について解明した。ここでは彼がどのような動機で金原省吾の東洋美術論、中川紀元の油絵、清水多嘉示の彫刻を学んだのかについて解釈した。

第三部では、帰国後の傅抱石が西洋的な要素をどのように画風に応用し、彼と同時代の人々や後世の研究者たちがどのようにそれを認識していたのかを問うた。傅抱石の交友関係を分析すると、彼は芸術の社会的な効用を重要視して、時流に応じて、意識的に画風の調整を行っていた経緯がわかる。傅抱石は歴史人物の「屈原」を描くことで、民族文化の英雄像を作り上げることに関与した。これは、従来の定説のように、日本画に啓発されたからではなく、西洋の「歴史画」概念が中国で受容された結果であることを、本論文では立証した。

また、傅抱石の画を分析すると、1935年までの作品は未熟で、伝統な様式に従っていることがわかる。新画風の成立は、中華人民共和国成立の1949年を境にして、二部に分けて検討した。1940年前後から、空気や光の存在感を強調する傾向が強くなり、実在の風景を写実する作例も増えた。よって、画面の効果や技法の具体的な分析を通じて、フランスの印象派やイギリスのロマン派との類似性を述べた。そして1950年代以降、社会主義リアリズムの風潮に伴い、傅抱石は地質学や旅行写生の経験を活かし、写実性の一面を一層強化したことを挙げ、これは高島北海の地質学画論に従い発展された結果であると指摘した。

以上から判明するとおり、傅抱石の西洋への関心は、1930年頃から最晩年まで変わらなかったことがわかった。彼は写実と抽象のあいだの振幅を縫いながら、東洋・西洋美術が融合する可能性を探求していた。一時的に抽象的な野獣派に惹かれたものの、彼は最終的に写実に傾いて、外光派や地質学を選んだ。特に、イギリスやフランスからの影響は顕著である。具体的に、イギリス人画家のターナー(William Turner、1775年—1851年)や高島北海の『写山要訣』との関係性は注目に値する。1940年代、傅抱石は西欧のスポンサーたちの要望に応じるため、西洋要素を用いて「印象派」的な名声を発展させた。1949年以降は、西洋画家たちの評価を重要視しており、光・空気の表現や地質学式な写実理論に集中して取り組んだ。また、高島北海の地質学画論を基礎とし、傅抱石は地質学の勉強や写生旅行の経験を経て、独自の画風を成立させた。

傅抱石が生きていた時代は、「全盤西化」の思潮が中国で盛んだった。「中国美術衰頹論」、「中国美術西來說」、及び1950年代以降の社会主義リアリズムは、伝統的な中国美術を存続の危機に晒した。傅抱石は「中国画」を守るために、西洋への関心を隠し西洋優位論に反論しながら、中国美術の伝統を再解釈・発展させることに専念した。彼や彼の周辺の人々は、彼の画風への西洋の影響について、中国に古来存在した光・空気・地質学などの要素に「科学」の新知識を加えることで、彼の画風が発展したと解釈している。一方、1949年以降、外交環境の変化とともに、スポンサーの構成が変わり、西欧への進展も断念した。画評・宣伝文章の中で、西洋的な要素を強調する必要性もなくなりつつあり、これに関する言及が消えていく。このような複雑な背景があったために、これまでの研究では西洋からの影響が注目されてこなかったのだと考えられる。

このように、傅抱石の画風革新は西洋的な要素の受容を中心に成立したと結論付けられる。この新しい視点から、二十世紀前半の日本・中国・フランス・イギリスの美術交流の様相を一層明瞭にすることができるようになった。まさに異文化コミュニケーションのよい実例である。